

連載 オブジェクト指向と哲学

第 90 回 デカルト、炉部屋の夢(9)- 本質を類推する 2つの方法

河合 昭男

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~Kawai>

デカルトは省察 2[1]で蜜蝋とは何かを考える。火を近づけると全く異なる姿になってしまうが、それでも蜜蝋だと考える。これは物理的变化で素材の本質は変わっていないが、デカルトの時代には物理的变化と化学的变化という概念はまだなかった。

これはオブジェクトの状態変化です。熱による変化は、色・匂い・硬さなど偶有的な性質変化にすぎない。これらはクラス「蜜蝋」の属性であり本質ではない。例えば、ある色白の人が旅行から帰ってきたらすっかり日焼けして見違えるようになったとしても、それを別の人とは誰も思わない。

錬金術の時代、卑金属を金に変性させようとした。変性とは、偶有的な性質ではなく本質を変えることで、物理変化ではなく化学変化をいう。錬金術はその後、18 世紀に開花する化学につながる。近代物理学の基礎は 17 世紀のニュートン力学から、化学の基礎は 1 世紀遅れて 18 世紀に始まる。[2]

デカルトは蜜蝋の探求を始めたわけではない。素材はなんでもよかった。「私がいかなるものであるか」を探求しているが、物的な事物の方は明確に感覚できるのに精神は明確につかめない。省察 2 では、とりあえず蜜蝋の考察を取っかかりとした。

●本質を類推する

オブジェクトは自身の本質は知らない。本質はクラスが持っている。状態はわかる。外部からは、オブジェクトの状態は観察できる。クラスは直接観察できない。多数のオブジェクトから共通点を類推する。

カズオ・イシグロ「日の名残り」[3]には、偉大な執事と呼ばれる人たちの振る舞いの具体例を見て、その共通点から「偉大な執事」の本質を類推するという一節がある。プラトン「メノン」[4]では、徳のあると認められている人たちとその子たちの事例から「徳は人に教えられない」ことを類推する。外延からそれらの共通の特性として本質を類推する。アイデアは直接見えない。そ

の影からその存在を類推する。

偉大な執事の条件は品格ですが、品格はつまり徳です。偉大な執事と呼ばれる人たちは雇い主を選び、なんども転職します。『私どもは雇主の徳の高さを重視する傾向があると存じます。』[3]

ついでながら「日の名残り」は日本人が英語で書いた“The Remains of the Day”を、別の人が日本語訳されたものを我々は読み、品格と徳について考えるわけです。武士道を思い出しました。新渡戸稲造が、西欧人に日本人の精神的バックボーンを知ってもらうために英語で出版した“Bushido - The Soul of Japan”を別の人が日本語訳されたものを我々は読み、武士道について考えるわけです。偉大な執事の条件は仕事能力プラス品格すなわち徳であり、武士道も身体能力プラス徳です。

●別の方法

徳の本質をつかむもうひとつの方法は、プラトンの対話篇「プロタゴラス」[5]にヒントがあります。要約してしまうとプラトンが記述したソクラテス独特の言い回しがうまく伝わりませんが、連載第 5 回「徳とは何か」より要旨のみ抜粋します。(登場人物の発言は原文[5]を短縮しています)

--

プロタゴラス：徳は正義と節制と敬虔を部分としてもつ。

ソクラテス：部分には 2 つある。ひとつは顔の部分が目鼻口という部分。もうひとつは金塊の部分、つまりどこを取っても元と同じの部分。

プロタゴラス：もちろん前者。正義と節制と敬虔は別のもの。

--

そのうちに知恵と勇気も徳の部分に追加されます。

--

ソクラテス：勇気があるが正義ではない人や、正義であるが知恵のない人も徳がある人というべきか。

プロタゴラス：全て揃わないと徳ある人とは言えない。

--

プラトンの対話篇は、ソクラテスが次々質問し、対話者が答え、そのうちに対話者が当初の主

張の矛盾に気付かされるパターンで、結論はなく問題提起で終わります。2000 年以上前の問題提起が現在でも解決していません。

徳の部分として挙げられた 5 つの特性は、5 つ揃ってはじめて徳ある人になります。これらは徳の部分と考えるよりも 5 つの特性を分け持つ、つまりすべて継承するものが徳だと考えられます。(連載第 5 回「徳とは何か」)

この方法も言葉の言い換えに過ぎず、次に 5 つの特性の説明が必要になります。

●想起説

本質を類推する 2 つの方法、(1)「外延から類推する方法」と(2)「よりわかりやすい概念の共通部分として類推する方法」をあげました。(1)は自分が経験的によく知っているものが外延にあるなら理解できます。

(2)は例えば「徳」を直接説明できないので「正義・節制・敬虔・知恵・勇気」の 5 項目について第 1 の方法または第 2 の方法を繰り返し、最後に自分の経験的知識にたどりつけるかどうかにかかります。

経験とは普通自分が生まれてからのものです。ソクラテスは経験を想起するといいます。ソクラテスは輪廻転生を信じ、この世の人生で学んだ知識の他にイデア界で過去に学んできた知識は魂が覚えており、人はそれを何かのきっかけで想起することができるのだと考えました。[4] (連載第 9 回「知識とは何か (3) - 想起説」)

経験につながるものは自分で納得できます。そこから自分で合理的に説明できるものが個人の知識となります。

しかしデカルトは感覚を信じません。自分の感覚に基づく経験や、親・教師などの経験も同様に信じられません。絶対確実なものからスタートしたい。アルキメデスの槌子の支点となるものを見つけない。自分とは何かを探求したい。

--

アルキメデスが、地球全体をその場所からよそへ動かすために求めたものは、確固不動の一点だけであった。したがって私も、たとえほんのわずかでも、何か確実でゆるぎないものを見いだすならば、大きな希望をいだってよいはずである。[1]

--

●人間とは何か？

デカルトは省察 2 で自分とは何か、もちろん人間である、ならば「人間とは何か」を考えます。理性的動物などの言葉の言い換えは時間の無駄なので違うアプローチを考えます。

自然に浮かんでくるのは、まず自分の手足など身体です。次に身体の活動の源である精神です。感覚は身体に帰する。精神に期するものは何か、それは「考える」ということであることにたどり着きます。私とはすなわち考えるものです。考えている間私は存在し、考えるのをやめたら存在しない。

ここから蜜蝋の考察を始めます。

以下、次回...

参考書籍

- [1]デカルト、[訳]井上庄七／森啓／野田又夫、省察／情念論、2002、中公クラシックス
- [2]古山慶太、科学史年表、2011、中公新書
- [3]カズオ・イシグロ、[訳]土屋政雄、日の名残り、2001、早川書房
- [4]プラトン、[訳]藤沢令夫、メノン、1994、岩波文庫
- [5]プラトン、[訳]藤沢令夫、プロタゴラス、1988、岩波文庫